

木田市長の

どろんどろんと
コミュニケーション



「東北訪問記」

Vol.103

世界中に大きな衝撃を与えたあの東日本大震災より3年余り経ち、プライベートではありますが、宮城・岩手の被災地を訪れました。現在、南三陸町には鳥羽市からの応援として、8人目の派遣職員がおります。彼を激励しつつ、南三陸町長である佐藤仁町長に面会をしました。いつもパワフルな佐藤町長は、自身もあの津波で九死に一生を得ながら、へこたれることなく町の復興に頑張っていました。津波で流されてしまった町の跡地埋め立てによるかさ上げと共に住宅地の高台移転が進められています。被害を受けた住宅地などは雑草が生い茂り、被災直後のような痛々しさはなくなっています。道路を行き交うダンプロック

クの多さには驚かされました。日本中のダンブや重機、クレーンなどが集まってきているという印象を受けました。復興は遅れているとよく言われますが、このダンブ群を見ていると急速に復興するだろうと感じました。気仙沼、陸前高田、釜石などを訪問し、最後は宮古の田老地区を訪れました。高さ10メートルの巨大な防波堤で守られていたはずの田老でしたが、自然の猛威の前には、ひとたまりもありませんでした。山本宮古市長の紹介で、田畑ヨシさんという89才の女性に会うことができました。彼女は自分で紙芝居を作って、津波の恐ろしさを世間に広め、東北地方ではかなり有名な方です。ヨシさんの祖父は、子

どもの頃、明治の大津波で家族全てを亡くし、たった一人生き残ったそうです。また昭和8年の大津波では、母親がヨシさんの妹をおぶって逃げる途中、流され迫ってきたトタン屋根で両首を切断され、命を落としました。更に今回の大津波でヨシさんは、家も何もかも流されてしまいました。幸い妹さんの住む高台へ避難し、命だけは助かりました。

ヨシさんの紙芝居を見せていただいた後、妹のキヌさんの話を聞きました。高台から見ていると真つ黒な波が襲ってきました。その波は普通の波とは違い、黒く大きく、いくつもの小山のような波が一列になって、しかも二列、三列と連なって湾口へ迫ってきたそうです。最初の警報は聞こえたそうですが、その後は停電等の理由により、次報を待っている住民のところへは何も届きませんでした。キヌさんが近代的な情報伝達装置より、昔の半鐘の方が、いざという時には役立つような気がすると言われていたのが、とても印象的でした。次は、我々を襲うかもしれない大津波に対する備えの重要性を再認識させられた旅でありました。



Vol.133

『子どもに育てたい力！』 「豊かな就学前人権実践交流会」に参加して

ます。近年、核家族化・価値観の多様化が進む中で、一生懸命さ・まじめさが、子どもに伝わらなくなってきたと思います。現代社会では、子どもが親の後ろ姿を見て育たなくなってきたのです。「一生懸命はダサイ姿！かっこ悪い！」と子どもは見ているように感じます。また、大人も、よりどころとなる価値観を持っておらず、大人が自信をぶつけていない、そんな気がしてなりません。

経済的な豊かさを手に入れることが幸せと感じられる時代から、目指すもの、頑張るもの（目標・希望）が見つけにくい厳しい時代を迎えています。社会の不正や犯罪ばかりのニュースが目立ち、たくさんの報道は、子どもたちに大人不信を助長し、目指す将来像に大きく影響しています。

子どもたちの課題の深刻さは、大人がもたらしたものであるからこそ、子どもたちの声にしっかりと耳を傾け、大人側にある課題に真剣に立ち向かうことで、子どもたちに育てたい力が見えてくるのではないのでしょうか。